Journal of National Fisheries University 48 (4) 311−319 (2000)

*The Family Reunion*におけるハリーの人生の再出発
― T. S. エリオットの中道思想の影響 ―

古賀元章[*1]

Harry's New Start in Life in *The Family Reunion* : The Influence of T. S. Eliot's Moderate Thought

Motoaki Koga[*1]

In T. S. Eliot's poetic drama, *The Family Reunion* (1939), Harry, Lord Monchensey and Amy's eldest son, leaves home in an attempt to eliminate his sense of alienation. After discovering from his Aunt Agatha that his father had attempted to kill his wife, Harry realizes that the cause is deeply rooted in the sin of his father. Therefore, he makes a fresh start in an effort to atone for the sin and free himself from his alienation.

To do this, Harry must depart again from his home. In this scene, Eliot, who studied Buddhism and the works of the British philosopher F. H. Bradley, suggests the belief that there are the two worlds: an "everyday" world and Harry's "ideal" world. In addition, Harry's belief in action emphasizes two American philosophers, C. S. Peirce and William James, whose works Eliot valued. Therefore, it is evident that Harry's new start in life represents both the Oriental and the Occidental beliefs. Harry's characterization is influenced by Eliot's moderate thought which can accept these beliefs.

はじめに

本稿で焦点を当てるのは，T. S. Eliot の詩劇 *The Family Reunion* (1939) に登場する主人公 Harry の言動である。人生における疎外感から逃れるために妻と一緒にモンチェンシー (Monchensey) 家を出たハリーは，外国で妻を船上から突き落として死なせてしまったと思う。結果的に，彼は心の安らぎを見出すことができないまま，8年ぶりに帰郷する。生前の父親が高圧的な妻 Amy (ハリーの母親) を殺害しようとした事実を知って，ハリーは疎外感の原因を知る。それは，自分の行為が生前の父親のそれと無関係ではないことである。このことを契機として，ハリーはモンチェンシー家に宿る罪を償わなければならない人間であると考えて再び旅立つ。なぜなら，それが彼の苦悩の解決につながるからである。

ところで，*The Family Reunion* を執筆した当時のエリオットは，アングロ・カトリック教徒である。この宗教は，本稿で後述するように，中道思想に立脚している。したがって，ハリーの人生の再出発には，

水産大学校研究業績 第1631号，1999年10月25日受付.
Contribution from National Fisheries University, No.1631. Received Oct. 25, 1999.
＊1 水産大学校水産情報経営学科社会文化講座 (Lab of Social and Cultural Studies, Department of Fisheries Information and Management, National Fisheries University).

アングロ・カトリック教徒としてのエリオットの中道思想の影響が認められるように思われる。以下で，この影響を検討してみたい。

1 始まりと終わりの同時的存在

The Family Reunion の舞台は，北イングランドの田舎ウィッシュウッド（Wishwood）のモンチェンシー家である。この家の未亡人エイミーは，自分の誕生日に親族を招いている。一同は，エイミーの三人の息子たちが帰郷するのを待っている。彼女は，親族が集まる機会に，長男のハリーを当家の跡継ぎにして隠居するつもりである。

一同の歓迎とは裏腹に，モンチェンシー家に戻って来た彼は，"Can't you see them? *You* don't see them, / but I see them, /And they see me." (292)[1]と言う。ハリーの突拍子もない言葉を聞いて驚いたエイミーたちは，昔と何も変わっていないことを述べて，彼を落ち着かせようとする。しかし，エイミーたちの試みはうまく行かなかった。

後に，ハリーと Agatha（母親の妹）の二人だけが語り合う場面がある。彼は8年前，永遠の孤立感を抱き，次第に麻痺状態に陥った。ヨーロッパを放浪しても，こうした苦しみを取り除くことができなかったので，彼は故郷に帰って来たのである。自分の苦しみの源を捜し出そうとして，彼は父親のことを話してくれるようにアガサにお願いする。彼女はハリーに生前の父親のことを打ち明ける。彼女によれば，気の弱い父親は妻のエイミーの支配に頭が上がらないので，彼女を殺そうとした。当時のエイミーがハリーを身籠もっていたので，アガサはハリーの父親の行為を止めた。ハリーはヨーロッパを放浪中，船上から海中へ妻を突き落として殺害したと思っていた。アガサの話を聞いた彼は，父親の犯した行為を繰り返えそうとしていたことを意識するばかりではなく，父親にまで遡るモンチェンシー家の罪を償わなければならないことも意識する。

この時のハリーの心境が次のように書かれている。

> Look, I do not know why,
> I feel happy for a moment, as if I had come home.
> It is quite irrational, but now
> I feel quite happy, as if happiness
> Did not consist in getting what one wanted
> Or in getting rid of what can't be got rid of
> But in a different vision. This is like an end.
> (333-34)

彼は，ほしいものを手に入れたり，嫌なことから逃れたりする以前の自分から抜け出して，心の安らぎを感じ取っている。

ハリーのそうした幸福な気分に対して，アガサは "And a beginning." (334) と述べる。彼女のこの言葉の意味がその後明らかになる。ハリーはモンチェンシー家の家督を弟のJohnに任せて，人生の再出発をするのである。その際，彼の言葉 "I must follow the bright angels." (339) に注目したい。彼に取りついて離れない相手の呼び名が，脅迫観念の対象である "them" や "they" から人生の導き手である "the bright angels" へと変化している。この変化から，"them"や "they" や "the bright angels"は，彼の内面の気持ちが外に現れたものであると判断される。

以上のハリーの言動から明らかなように，彼の苦悩の始まりと終わりはモンチェンシー家で起こっている。また，彼の苦悩の終わりと人生の新たな始まりも同じ場所で起こっている。

こうした考え（始まりと終わりの同時的存在）は，彼がハーバード大学大学院生の時に傾倒した19世紀イギリスの哲学者F. H. Bradleyの哲学を受容していると言える。この点について論述したい。

大学院生のエリオットは1913年6月に，ブラッドリーの著書 *Appearance and Reality* を購入し勉強している（Ackroyd 48)。この著書には次のような見解がある。

> An honest and truth-seeking scepticism pushes questions to the end, and knows

that the end lies hid in that which is assumed at the beginning. (379)

懐疑主義者のブラッドリーにとって，解決は諸問題に直面した所で見出される。彼の実在認識の原点は，無時間・無場所における主客合一の「直接経験」("immediate experience")[1]である。この「直接経験」に基づいた彼の認識方法は，<今・ここ>で認識者と対象との直接の結びつきである。上の引用文は，ブラッドリーのこのような哲学思想を踏まえている。

エリオットは，大学院生の時に未発表の論文 "Degrees of Reality" (1913)を書いている。そこには次のような文章が見られる。

The token that a philosophy is true is, I think, the fact that it brings us to the exact point from which we started.... (qtd. in Perl and Tuck 119)

この文章は，エリオットが先のブラッドリーの哲学思想に依存していること[2]を示している。エリオットも，始まりと終わりの同時的存在を主張しているのである。

そうすると，再び家を出るハリーの行動には，始まりと終わりの同時的存在を唱えるブラッドリーの哲学の影響が認められる。

ところで，エリオットは大学院時代の1913－14年に，東京帝国大学教授の姉崎正治の講義 "Schools of the Religious and Philosophical Thought of Japan, As Compared with Those of India and China" を受けている (Jain 198)。エリオットが姉崎の講義から学んだことの一つは，"the idea of the salvation of the self through saving others" (Jain 199) である。この言葉は大乗仏教の〈菩薩〉を指している。この仏教用語の意味は次の通りである。

……自分一人の悟りを求めて修行するのではなく，悟りの真理を携えて現実の中におり立ち，世のため人のために実践（慈悲利他行）し，すすんでは悟りの真理によって現実社会の浄土化（浄仏国土）に努める者のことをいう。(『岩波仏教辞典』734)

〈菩薩〉の究極の目的であるこの世や人々の救済は，自らが立っている現実の場所から始まる。大乗仏教のこの教えには，ブラッドリーの哲学思想と同じく，始まりと終わりの同時的存在がうかがわれる。エリオットは，ハリーの行動に見られるこの同時的存在を仏教思想からも受け入れていると判断できる。

なぜエリオットは東西のこれらの思想の共通点を取り入れることができたのであろうか。その手がかりとなるのは，姉崎の講義についての彼の「ノート」[4]に書かれている次のような文章である。

The Tathāgata is always in Yoga, near sleeps or dreams. He is omniscient in any single moment – this becomes lotos on important tenet. – His being – become[s] the whole cosmos.
One section of Mahasamghika went another in distinguishing the appearance and the real, & thought these two to be an uncompromising antithesis (Bradley). loka artha and parama artha. (村田 32 に引用)

如来は常にヨーガの中にある。睡眠の近く，夢の中に。「如来」はあらゆる刹那に遍在する。(中略) これは重要な教義の蓮化となる。(中略) この存在が全宇宙となる。
大衆部の一派は別の道を辿り，実在的なものと観念的なものや思考を区別するに至る。これら二つは絶対に相容れない対立となる（ブラッドリー）。世俗と勝義。(村田訳，同上 32 に引用)

姉崎がヨーガ学派[5]の実在観と「仏教大衆部のある学派」("one section of the Mahāsāṁghika")[6]の実在観の違いを述べたとき，エリオットは上の文章を書き残している（村田 32)。前半の文章がヨーガ学派の実在観である。「如来」（真に実在するもの［村田

32]）はどんな瞬間にも，「ヨーガ」（統一された心的状態，主客統合の精神状態［村田 32]）に現れる。この教義が「蓮華」として示される。「如来」の存在が全宇宙を表す。後半は「仏教大衆部のある学派」の実在観である。この学派は，ヨーガ学派の実在観とは反対に，現象的なものと実在的なものを区別する。仏教用語で言えば，現象的なものは「世俗」であり，実在的なものは「勝義」である（村田 33)。エリオットは，「仏教大衆部のある学派」の実在観を聞いた際に，ブラッドリーの名前を括弧の中に書き込んでいる。ブラッドリーは，ヨーガ学派の場合のように，実在と現象の一体を説いている。エリオットは，「仏教大衆部のある学派」の実在観がブラッドリーの哲学思想と違うことを思い起こしているのである。

上の文章についての考察から，大学院時代のエリオットはブラッドリーの哲学と大乗仏教との共通点（始まりと終わりの同時的存在）に気づいたのである。彼は，*The Family Reunion* でのハリーの描写にこの共通点を参考にしたのであると言える。

その背景には，彼が1927年に入信した中道思想のアングロ・カトリックの影響が見逃せないであろう。彼はこのキリスト教について，次のように説明している。

> The *via media* which is the spirit of Anglicanism was the spirit of Elizabeth in all things; . . . ("Lancelot Andrewes" 14)

> In the long run, I believe that the Catholic Faith is also the only practical one. . . . There must always be a middle way, though sometimes a devious way when natural obstacles have to be circumvented; and this middle way will, I think, be found to be the way of orthodoxy: . . . ("Catholicism and International Order" 183-84)

彼が力点を置くのは，アングロ・カトリックの実用性と中道である。そこで，ハリーの行動は，アングロ・カトリック教徒として物事の妥当性を重視したエリオットの中道思想に基づいて描写されていると言える。こうした中道思想を背景として，彼は学生時代に学んだブラッドリーの哲学と大乗仏教との共通点を受け入れているのである。

2 ハリーの世俗的世界の嫌悪

ハリーが人生の再出発をする原因は，父親の代から続いていた罪を償うことであった。その背後には，モンチェンシー家の世俗的世界に対する彼の嫌悪がある。たとえば，彼はこの一家について次のように言う。

> The sudden solitude in a crowded desert
> In a thick smoke, many creatures moving
> Without direction, for no direction
> Leads anywhere but round and round in that vapour—
> Without purpose, and without principle of conduct
> In flickering intervals of light and darkness;
> The partial anæsthesia of suffering without feeling
> And partial observation of one's own automatism
> While the slow stain sinks deeper through the skin
> Tainting the flesh and discolouring the bone—
> This is what matters, but it is unspeakable,
> Untranslatable: . . . (294)

最初の5行は，*The Waste Land* (1922) における朝の通勤者たちの単調な光景[7]を連想させる。6行目は，"The Hollow Men" (1925) において薄明かりに包まれたような人々の現実[8]を伝えている。7—8行目は，我が身も周囲の人々も倦怠な日々を送っていることを認識する "The Love Song of J. Alfred Prufrock" (1910—11) の主人公プルーフロックの心

理描写[9]を感じさせる。

ハリーは，モンチェンシー家の日常世界がこれらの詩の中で描かれていたような退廃した人間社会であると見なしている。彼は別の場面で，自分自信の世界と同家の日常世界との断絶を次のように発言する。

> If I tried to explain, you could never understand:
> Explaining would only make a worse misunderstanding;
> Explaining would only set me farther away from you.
> There is only one way for you to understand
> And that is by seeing. . . . (309)

ハリーは，自分の苦悩をモンチェンシー家の人々に言葉で理解させることが絶対にできないと判断している。それ程，彼は自分自信と同家の人々との深い溝を自覚しているのである。

ハリーのこのような描写には，世間一般の人々に対するエリオットの見解がうかがわれる。彼は1919年に，"They [Beyle[10] and Flaubert] indicate also the indestructible barriers between one human being and another." ("Beyle and Balzac" 393) と考えている。この考えは，彼が Paul Elmer More に宛てた手紙（1928年懺悔火曜日 [Shrove Tuesday]）中で，次のように展開されている。

> —the void that I find in the middle of all human happiness and all human relations, and which there is only one thing to fill. I am one whom this sense of void tends to drive towards asceticism or sensuality, and only Christianity helps to reconcile me to life, which is otherwise disgusting. But the people I have in mind—and the good ones are much more puzzling than the bad—have an easy and innocent of life that I simply cannot understand."

評論 "Beyle and Balzac" からの引用文と上の文章とを結びつけてみると，エリオットから見て "the indestructible barriers" を境にした世俗的世界には，「空虚」("the void") が感じられる。彼のこのような空虚感が，モンチェンシー家の世俗的世界を嫌うハリーの思考に示されていたのである。また，エリオットが心に抱く善良な人々が，同家の人々に当てはまるのである。

この種の空虚感を取り除いてくれるのは，エリオットにとって，中道を掲げるアングロ・カトリックである。彼の中道思想は，前述したように，このキリスト教を基盤としているのである。

3 ハリーの世俗的世界からの再出発

ハリーは，"There is only one way for you to understand ／ And that is by seeing." と考えていた。その考えは，彼がモンチェンシー家から再び旅立ことである。息子の行動を知って，エイミーは "Harry is going away—to become a missionary." (344) と言う。彼女の発言に対して，彼は "I never said that I was going to be a missionary." (344) と答える。結局，彼が家を出て何をするつもりなのかは明らかではない。こうした曖昧な描写は，エリオットの中道思想を反映していると言える。この中道思想は，1935年の詩 "Burnt Norton" の次のような詩行で言い表すことができるであろう。

> What might have been and what has been
> Point to one end, which is always present.
> (171, 172)

この詩行を参考にすると，ハリーがどのような道を選択しようとも，その選択はモンチェンシー家の罪を償おうとする彼にとって同じ目標につながることになるのである。

この目標は，ハリーの次のような台詞に見出される。

> . . . I am still befouled,
> But I know there is only one way out of defilement—
> Which leads in the end to reconciliation.
> And I know that I must go. (337)

本稿でのこれまでの論考に照らすと，彼が人生の再出発をするのは，自分の世界とモンチェンシー家の人々の日常世界とを「調和」（"reconciliation"）させることである。

ここで，ハリーが再び旅立つ行動に注意してみよう。彼の行動には，仏教の〈出家〉の影響が見られる（村田 285-86, 289-91, 296, 303, 314)。エリオットは「ノート」に，姉崎から学んだ〈出家〉について次のように書き残している。

> . . . To be perfectly moral, according to the Buddhist ideal, all the conditions of the *sīla* should be fulfilled, for which monastic life or homeless life (*anāgāra*) is a necessary condition. It is evident that the Buddha recommended the life of an ascetic (*samaṇa*) as the fittest for perfect morality, but at the same time it should be noted that the household life (*sāgāra*) was not totally excluded from salvation. . . . (NEP app. 21; 村田 328 に引用)

> ……完全に道徳的であるためには，仏教の理想からすれば，戒の総ての条件が満たされるべきなのである。そのためには修道生活あるいは家を捨てた生活（出家）が必要な条件となる。明らかに仏陀は禁欲生活を完全な道徳には最も相応しいものとして奨めていたが，同時にまた家にいての生活（在家）は必ずしも全く救済から除外されたものでないといっていたことにも注目すべきである。……（村田訳，同上 328)

このような〈出家〉の意味が，モンチェンシー家の家督を放棄して旅立つハリーの行動に影響を及ぼしている。

ところで，Walter Benn Michaels は，エリオットの著書 *Notes towards the Definition of Culture* (1948) の次のような一節に言及している（"Philosophy in Kinkanja" 196)。[12]

> The reflection that what we believe is not merely what we formulate and subscribe to, but that behaviour is also belief, and that even the most conscious and developed of us live also at the level on which belief and behaviour cannot be distinguished, is one that may, once we allow our imagination to play upon it, be very disconcerning. (32)

マイケルズは，エリオットに見られる信念が19－20世紀アメリカの科学者・論理学者・哲学者 C. S. Peirce の次のような見解を踏まえていることを述べている（"Philosophy in Kinkanja" 196)。

> The essence of belief is the establishment of a habit; and different beliefs are distinguished by the different modes of action to which they give rise. If beliefs do not differ in this respect, if they appease the same doubt by producing the same rule of action, then no mere differences in the manner of consciousness of them can make them different beliefs, any more than playing a tune in different keys is playing different tunes. (Peirce 255)

マイケルズの指摘する通り，信念が行動へと直結するというパースの考えは，エリオットの1948の著書の一節に認められる。エリオットは，少なくとも大学院時代に出席した哲学者 Josiah Royce のセミナーでパースの名前を知っている（Costello 76, 82, 84-85,

88-89)。後年のエリオットは，この哲学者の信念説を忘れていないのである。

エリオットは，パースと同じような信念説を19－20世紀アメリカの心理学者・哲学者 William James からも学んでいる。それは，評論 "William James on Immortality" (1917) におけるエリオットの次のような言葉からうかがわれる。

> His [James] own personal feeling about immortality, he admits frankly, "has never been of the keenest order," but he had great curiosity, and a curiously charming willingness to believe anything that seemed preposterous to the ordinary scientific mind. He hated oppression in any form; the oppression of dogmatic theology was remote from him, who lived in the atmosphere of Unitarian Harvard; but the oppression of idealistic philosophy and the oppression of scientific materialism were very real to him. Many of James's ideas may be due rather to his antipathy to other people's narrow convictions than to convictions of his own; . . .
>
> . . . It would be easy to pick the lecture to pieces; its binding fluid is its attack upon dogmatic disbelief, not any constructive theory. But James has an exceptional quality of always leaving his reader with the feeling that the world is full of possibilities－in a philosopher, a rare and valuable quality; and what seems scepticism or inconsistency or vagueness in others, James has the knack of communicating as a sense of sincere adventurousness. (547)

エリオットは信念を重視するジェイムズを称賛している。ジェイムズの信念説もエリオットの1948年の著書の一節に影を落としていると判断できよう。

こうして，ハリーが家を出る行動は，仏教の〈出家〉の影響ばかりではなく，パースやジェイムズの信念説の影響も受けて描かれていると言える。ここにも，ブラッドリーの哲学と仏教の共通点を共に受容したように，アングロ・カトリック信仰を基盤としたエリオットの中道思想が反映されている。

ハリーは，今回の旅立ちを母親に次のように語る。

> . . . Only
> be sure
> That I know what I am doing, and what I must do,
> And that it is the best thing for everybody. (338)

この台詞から読み取れるのは，ハリーの人生の再出発が自らの精神的再生ばかりではなく，モンチェンシー家の人々の救済を目指している，ということである。そのことが，本稿で指摘した二つの世界の「調和」を実現させることになるのである。

おわりに

実用性と中道を掲げるアングロ・カトリック信仰に基づいて，エリオットはハリーの人生の再出発を描写している。アングロ・カトリックの中道思想を背景として，彼は学生時代に勉学した東西のいろいろな思想をその描写に取り入れている。そこには，独自の劇作家としての彼の姿がうかがわれる。

しかし，ハリーの行動には問題点が残っている。それは，彼のその後の人生が明らかにされていないことであり，また，モンチェンシー家の人々の救済も具体的ではないことである。換言すれば，彼の目指す世界と同家の日常世界との「調和」がはっきり示されていないのである。この問題点については，別の機会にエリオットの次の詩劇 *The Cocktail Party* (1950) で検討したい。

注

1. エリオットの作品からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁である。
2. この哲学概念の詳細については，*Essays on Truth and Reality* 159-91 を参照。
3. この点については，エリオットが評論 "London Letter" (1921) の中で，次のように発言していることから判断できる。

   Even the author [George Bernard Shaw] appears to be conscious of the question whether the beginning and the end are not the same, and whether, as Mr Bradley says, "whatever you know, it is all one." . . .

   There is evidence that Mr Shaw has many thoughts by the way; as a rule he welcomes them and seldom dismisses them as irrelevant. The pessimism of the conclusion of his last book is a thought which he has neither welcomed nor dismissed; and it is pessimism only because he has not realized that at the end he has only approached a beginning, that his end is only the starting point towards the knowledge of life. (455)
4. この「ノート」は，ハーバード大学のホートン図書館に保存されている。そこでは，"T. S. Eliot, Notes on Eastern Philosophy, A. MS. and TS. (carbon copy) with A. MS. annotations; 3 Oct. [1913]-15 May [1914]. 62 s. (80p.) T. S. Collection, The Houghton Library, Harvard University" と記されている（村田 561注)。以下，NEPと略す。
5. ヨーガ学派については，次のような「ヨーガ」の解説を参照（『岩波仏教辞典』816-17)。

   「原語を音写して〈瑜伽〉，意訳して〈相応〉，などと表す。わが国では〈ヨガ〉と表記することがあるが，yoは長母音をもって発音される。結ぶ，繋ぐの意味の動詞ユジ(yuj-)より派生した語であるが，実際は様々な文脈で様々な意味で用いられる。〈結合〉〈繋ぐこと〉とのかねあいで個々の語義が説明される。基本的には，解脱（悟り）に向けてのなんらかの〈実践〉〈修練〉，特に〈精神統一〉と解し得る。その起源をインダス文明にまで辿りうるともいわれる，ある点では曖昧模糊としたこのヨーガという語の意義を明確にしたのは，その名前を付せられたインドの六派哲学の一派ヨーガである。その成立への仏教からの影響も看過しえぬほか，有神論という点では区別されるもののサーンキヤ学派とは密接な関係を指摘される。開祖パタンジャリ (Patañjali)に帰される紀元２－４世紀成立のその根本教典『ヨーガ-スートラ』冒頭部で，ヨーガは「心作用の抑制」(citta-vṛtti-nirodha) と明確に定義され，三昧 (samādhi) に至るまでの八実修法などによって体系されたものは，他学派の実践手段としても採用されるにいたる。」
6. 村田氏は僧祇部などを考えている (32)。
7. 拙稿「*The Waste Land*と Marie Lloyd」を参照。
8. 拙稿「"The Hollow Men"における二つの世界の暗示」を参照。
9. 拙稿「"The Love Song of J. Alfred Prufrock" における語り手の苦悩」を参照。
10. 18－19世紀フランスの小説家・批評家 Stendhal の本名 Marie Henri Beyle を指す。
11. プリンストン大学に所蔵されているモア資料からの引用による。
12. 本稿で触れるパースやジェイムズのエリオットへの影響については，拙稿「T. S. エリオットの文学批評論」と同じような記述内容があることをお断りしたい。

引用文献

Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.

Bradley, F. H. *Appearance and Reality : A Metaphysical Essays*. 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.

---. *Essays on Truth and Reality*. 1914. Oxford: Clarendon P, 1962.

Costello, Harry T. *Josiah Royce's Seminar, 1913-1914: As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello*. Ed. Grover Smith. New Brunswick, NJ: Ruters UP, 1963.

Eliot, T. S. "William James on Immortality." *New Statesman* 9: 231(8 Sept. 1917): 547.

---. "Beyle and Balzac." *Athenaeum* 4648(30 May 1919): 392-93.

---. "London Letter." *Dial* 71.4(Oct.1921): 452-55.

---. "Lancelot Andrewes." 1928. *For Lancelot Andrewes : Essays on Style and Order*. London: Faber and Gwyer, 1929. 13-32.

---. Letter to Paul Elmer More. Shrove Tuesday 1928. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.

---. "Catholicism and International Order; Opening Address to the Anglo-Catholic Summer School of Sociology." *Christendom* 3.2 (Sept. 1933): 171-184.

---. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.

---. *Notes towards the Definition of Culture*. 1948. London: Faber and Faber, 1949.

Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.

Michaels, Walter Benn. "Philosophy in Kinkanja: Eliot's Pragmatism." *Glyph 8*. Ed. Walter Benn Michaels. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1981. 170-202.

Peirce, C. S. *Pragmatism and Pragmaticism*. Vol. 5 of *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*. Ed. Charles Hartshorne and Paul Weiss. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1934. 8 vols. 1931-58.

Perl, Jeffrey M. and Andrew Tuck. "The Hidden Advantage of Tradition: On the Significance of T. S. Eliot's Indic Studies." *Philosophy East and West* 35:2 (Apr. 1985): 115-31.

古賀元章. 「"The Love Song of J. Alfred Prufrock" における語り手の苦悩」『松元寛先生退官記念英米文学語学研究』. 松元寛先生退官記念論文集刊行委員会編. 東京 : 英宝社, 1987. 269-75.

---. 「*The Waste Land* と Marie Lloyd」『熊本大学英語英文学』(熊大学英文学会) 31(1988): 45-60.

---. 「"The Hollow Men"における二つの世界の暗示」『英語英文學研究』(広島大学英文学会) 37(1993): 59-70.

---. 「T. S. エリオットの文学批評論」『水産大学校研究報告』47.4 (1999): 253-64.

中村 元・福永光司・田村芳朗・今野 達編. 『岩波仏教辞典』. 1989. 東京 : 岩波書店, 1994.

村田辰夫. 『T. S. エリオットと印度・仏教思想』. 東京 : 国文社, 1998.